

2021年度学術交流支援資金報告書

2022年2月28日提出

科目名 AP 多言語多文化共生社会

課題名 グローバル連携に基づく多言語多文化共生社会構築への挑戦

1. 全体の進展

コロナ禍が続き、調査の実施に様々な制約がかかる中で、AP 担当教員と博士課程の学生により「トランスランゲージング」を中核のアプローチとする共同のアクションリサーチのプロジェクトを立ち上げ、初年度から、インタビュー実施など、顕著な進展を生み出すことができました。また、慶應義塾のスーパーグローバル海外副指導教授の制度とも連携して、これらの研究活動についての報告とコメント・フィードバックを得る国際研究セミナーを実施した。個別の研究活動についても、困難な状況の中でそれぞれに進捗をみた。来年度以降は、これらの研究の更なる進展とともに、国際学会やグローバルジャーナルへの投稿などを視野に入れることとなる。

2. 個別の研究プロジェクトの進展

以下、申請書に記載した研究活動の一つ一つにつき、進展を述べる。

(1) SFCの教室におけるトランスランゲージング空間の形成

この大学院アカデミック・プロジェクト(以下 AP)では、日本語および英語を主たる使用言語としつつ、参加者間でその他の言語の使用も推奨するという言語ポリシーを示している。この言語ポリシーの下での言語実践はいかなる様相を呈し、参加者はいかなる経験をしているのかを追究しながら、AP 活動そのものを検討して改善していく研究を行った。具体的には、本 AP にかかわる活動(授業およびミーティング)とそこに参加する人々を対象として、トランスランゲージング空間(translanguaging space)の観点でのアクションリサーチをデザインし、実行に移した。トランスランゲージングとは、複数言語話者が複数の言語リソースを状況にあわせて使いながら、知識の獲得や思考を深める言語活動である。そして、トランスランゲージングを通じて社会言語活動を行う空間は「トランスランゲージング空間」(Li Wei 2011) という概念で表わされる。本年度の研究成果を、1)アクションリサーチの進展、2)トランスランゲージング研究の第一人者であるリー・ウェイ氏との合同セッションでの発表、3)今後の課題の3点から記す。

1) アクションリサーチの進展

2017 年度から開始した多言語多文化共生社会 AP は、2021 年度に 5 年目に入った。改めて AP での実践活動を検討して改善するため、専任教員 3 名(藤田・馬場・杉原)を中心としてアクションリサーチを開始した。大学院 AP は教員と学生が参画する研究プロジェクトを推進する場という主旨に鑑み、AP 参加者全員に対してアクションリサーチの参加を呼びかけ、博士学生 1 名のリサーチ推進側への参加を得た。そして、当該 AP 参加経験の語りの共有(インタビュー)と授業観察を開始し、秋学期を通じて教員 2 名と学生 8 名に当該 AP の参加の経験について語ってもらい、その録音を文字化しデータとして分析を進めている。語りの分析は解釈的現象学的分

析(IPA)の方法論を用いる。研究成果については 2023 年 7 月の THE AILA (International Association of Applied Linguistics) WORLD CONGRESS で口頭発表を行うことを予定し、2022 年 4 月に応募予定である。AP 改善面については、この経験の語りの共有によって AP 運営の課題が複数提起され、例えば輪読セッションのあり方等の具体的な改善を行った。

2) リー・ウェイ氏との合同セッションでの発表(2021 年 11 月 19 日)

<https://multilingual.sfc.keio.ac.jp/?p=480>

トランスランゲージング研究の第一人者であるリー・ウェイ氏 (Prof. Li Wei, University College London) にオンラインで AP に参加してもらい、トランスランゲージングにかかわる4つの研究および研究計画を発表するセッションを行って、本アクションリサーチについても具体的なコメントをもらった。

発表タイトル; Critical Action Research: Translanguaging Space Co-created and Lived by Students and Teachers in Academic Project “Multilingual and Multicultural Society.”

3) 今後の課題

当初は授業改善を目的とする教育的側面が強かったが、この 1 年間の研究の進展を踏まえて、2022 年度からは単なる授業改善を超えたエスノグラフィー研究(授業観察と参加者の経験全般のなかに AP の経験・活動を位置付けるインタビューを統合した研究)を行っていく計画である。

(2) 難民の日本社会及び日本語への適応過程の理解と日本語教育支援

本研究では、「難民の日本社会及び日本語への適応過程の理解と日本語教育支援」について日本に逃れ、日本で生活する難民の適応過程と、支援者、特に日本語学習支援者の熟達化過程について調査を行った。研究方法としては、複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) を用いた。

TEA とは、人の成長を時間的変化と文化社会的文脈との関係の中で捉えて記述するための方法論、オープンシステムに基づき記述するための分析するための枠組みである。TEA は等至性 (Equifinality) という概念を発達の、文化的事象の心理学的研究に組み込もうと考えた Valsiner の考えに基づいている。(Valsiner & Sato, 2006¹)

今年度は、難民の日本語学習を支援している人4名を対象にインタビュー調査を行い、TEA を用いて日本語学習支援者の熟達化過程のモデル化を試みた。

¹ Valsiner, J. & Sato, T. (2006). Historically Structured Sampling (HSS): How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology? In Straub, J. , Kolbl, C. , Weidemann, D. & Zielke, B. (Eds.) Pursuit of meaning. Advances in cultural and cross-cultural psychology (pp.215-251). Bielefeld: Transcript Verlag.

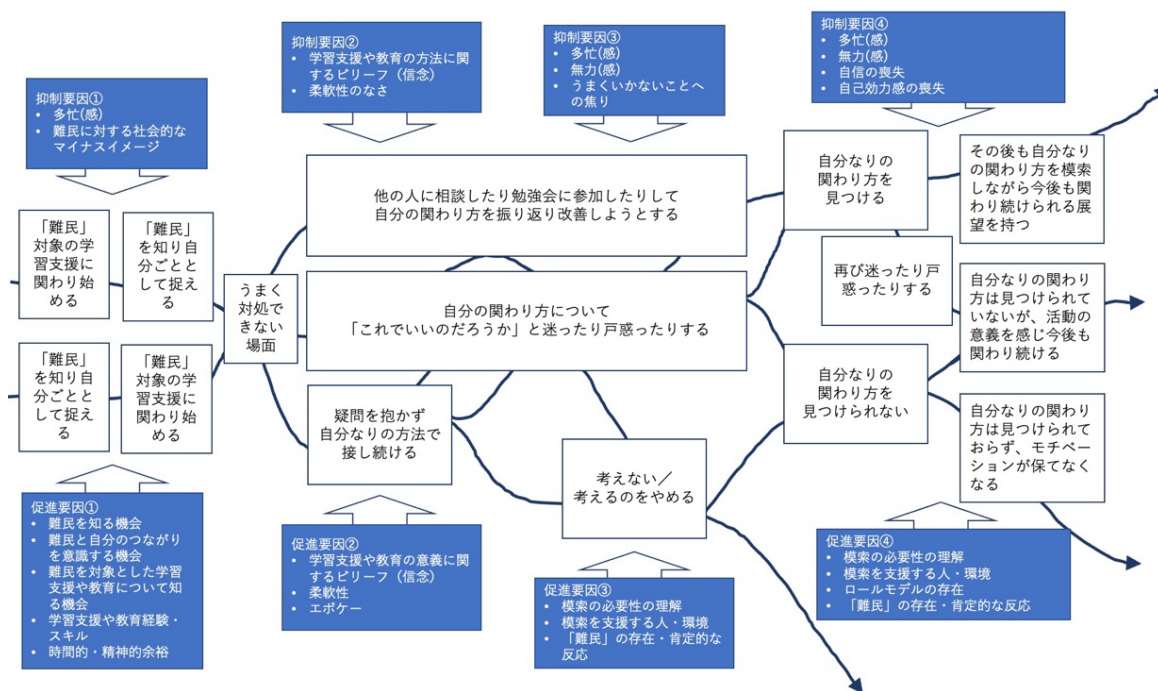


図 1 日本語学習支援者の熟達化過程モデル(仮)

これはまだ仮のものであり、今後9名前後を目標にインタビュー対象者を広げていく。また、難民の適応過程に関する調査および過程のモデル化については、この 1 年で難民を取り巻く環境も大きく変化していることもあり、次年度に継続的な課題としたい。

(3)ドイツ語圏に滞在経験のある子どもへの日本国内でのドイツ語保持教育

本研究では、ドイツ語話者を親に持つ子どもやドイツ語圏での滞在経験がある子どもを、ドイツ語のみの使用が義務付けられた授業を通じて「バイリンガル」として育成する活動を展開してきた京都ドイツ語補習教室 (Deutsche Samstagsschule Kyoto) を事例として、トランスランゲージングの観点から言語の概念そのものを捉え返すことで、より柔軟なドイツ語教育の可能性を模索することを計画していた。

しかし同教室では、デルタ株の流行が落ち着き始めた 2021 年 10 月以降、対面での授業を再開していたものの、オミクロン株の登場により、2022 年に入って再びオンライン授業ないし休講を余儀なくされている。こうした事情のため、調査者が京都に赴き、同教室で調査を実施するのは困難な状況が続いた。

そこで、当初の計画を変更し、教室運営責任者や教員と直接会って関係を構築したうえで調査を実施するのではなく、まず調査者側でトランスランゲージングという観点から授業プランを構想し、同教室での調査が可能になり次第、その授業プランの実践を提案するという手順を取ることにした。

今年度はその第一歩として、リー・ウェイ氏との合同セッション(2021 年 11 月 19 日)において、“Investigation on the applicability of translanguaging to the language retention and the heritage language education in Japan”と題した研究計画の発表を行い、本研究へのコメントをもらった。

今後はトランスランゲージングへの理解をより一層深めるとともに、リー氏からもらったコメントを踏まえつつ、具体的な授業プランを考案していく。

(4) 日系人コミュニティの継承言語としてのスペイン語教育の課題に向けた教材開発

この日本社会のスペイン語話者コミュニティにおける継承言語としてのスペイン語についての研究は、若い世代における継承言語の維持に焦点を当てている。今年度においては継承言語の学習者とその親たちから、インタビュー調査と質問票を、対面とオンラインの形式を組み合わせるかたちで実施した。また、神奈川県におけるスペイン語の土曜学校における参与観察と非参与観察を実施した。今年度の調査結果にもとづき、小学生の継承言語の学習者が利用できるような学習教材を開発し、これによってコミュニティ・スクールの教師や親たちがスペイン語能力の強化のためにこれを用いることが可能になった。

また、スペイン語継承言語教育の先端を行くアメリカ合衆国で、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) の全国継承言語リソース・センター (National Heritage Language Resource Center) が主催する一連のワークショップに参加し、専門的知見を深めるとともに、来年度以降の調査や研究発表につながる人脈形成を行った。また、今年度は立命館アジア太平洋大学が主催する国際会議に“Diversity among Spanish Heritage Language Learners: Challenges and Perspectives in Japan”と題した口頭発表を共同研究者らとともにに行い、また引き続き来年度に向けて5月に日本・スペイン・ラテンアメリカ学会 (CANELA) での口頭発表が採択されている。

(5) アイヌ語の復興に取り組む若い世代の意識の研究

コロナ禍の中で、アイヌ語を日常生活に取り戻すことを目指す取り組みは、オンラインでも活発化しており、週に1回のダイレクトメソッドを用いたアイヌ語の練習会と、もう1回のより自由な会話を試みる場が、Zoom を用いてオンラインで開催されており、北海道・本州・ハワイなどから30名超の人数がそこに集まっている。これに、現地で行われている対面での活動を組み合わせるならば、深刻な危機状態にあるアイヌ語においても、かなり活発な言語学習の場がそこに成立していると言ってよいであろう。今年度は、このオンラインのアイヌ語学習の場に参加し、観察を行うとともに、サポート役として学習者へのフィードバックや疑問への応答をおこなった。また、コロナの感染状況が穏やかである期間を利用して、現地訪問を行い、現地でのアイヌ語復興の試みについても参与観察を行った。

アイヌ語復興においては、まず第一にアイヌ語の習得が優先されるが、同時に複数の言語間の相互作用や数えられる言語の枠を解体しようとするトランスランゲージングのアプローチが有効であると思われる場面も多い。このような先住民言語の復興におけるトランスランゲージングの考え方の可能性と限界について、上記リー・ウェイ氏との共同国際セミナー (2021年11月19日) で報告を行い、今後の研究の可能性を模索した。

来年度に向けて、このようなアイヌ語復興の場に関わる参加者たちのアイヌ語学習の動機付けやアイヌ語に対する考えを、より詳細に調査する準備を進めている。これについては、現地のこの取り組みのコーディネートに関わるアイヌや和人の若者が主導権を握るようなかたちで、複数の研究者が協力しつつ進めたいと考えており、既に現地での主催者らの同意を得て打ち合わせを進めており、2022年度からは参加者との協議・同意取り付けを経て、実際に調査の実施へと進めたいと考えている。

3. 今年度の関連業績

口頭発表

Hori, Yaeko and Sugihara, Yumi (2021) “Investigating an Invisible Bilingual/Kikokushijo from Translanguaging Perspectives.” The 4th JAAL (Japan Association of Applied Linguistics) in

JACET(Japan Association of College English Teachers) 第 4 回 JAAL in JACET(日本応用言語学会)学術交流集会

Shintani, Roxana, Rie Takabatake, and Patricia Takayama (2021) “Diversity among Spanish Heritage Language Learners: Challenges and Perspectives in Japan.” Asia Pacific Conference 2021: Diversity and Inclusion, Ritsumeikan Center for Asia Pacific Studies, Ritsumeikan Asia Pacific Univerisity, December 5.

論文

Hori, Yaeko and Sugihara, Yumi (in press) “Investigating an Invisible Bilingual/Kikokusei from Translanguaging Perspectives.” *JAAL in JACET Proceedings*, Vol.4.

以上